



わたし かいせつしゃ 私がプラネタリウム解説者になったいきさつ

小学校3年生だった私は、星に興味を持ち始めていました。買ってもらった図鑑にプラネタリウムというものが載っていて、星座のことを教えてくれるというので、見たいなあと思っていました。1966年6月、九州から叔父が上京し、どこかへ連れて行ってくれる事になり、それならプラネタリウムへとリクエストした結果、叔父、父、私、妹の4名で渋谷の五島プラネタリウムを見に行くことになりました。蒸し暑い雨の日でした。

客席に着いて、天井を見上げると、雨漏り模様が随所に見られ、どうしてここに星座が現れるのだろうか？不思議で仕方ありません。星が映し出されて始めて、「これは真ん中の機械が映しているのだ」ということを理解したのでした。しかし、その星空は、これまで見たどの星空より美しくリアルに感じられ、大感激したのを覚えています。矢印ポインターを使っての解説を食い入るように聞きました。子ども心に、解説者の知識の豊富さにも感心しました。解説者は優しい声の男の人で、名前は分かりませんが、かすかな記憶を辿ると、有名な大谷豊和さんではなかったかと思われます。

天文少年になった生意気な私は、「プラネタリウムは人工の星でまがい物だ」などと思うようになり、中学高校と足を運ぶことはほとんどありません。それが、今ではプラネタリウムの仕事をしているのですから人生不思議なものです。それには、もう1つ2つのいきさつがあります。



あの時の機械はいまでも展示品として残っています。渋谷区文化施設大和田にて。